

『計量国語学』アーカイブ

ID	KK280801
種別	調査報告
タイトル	中国の大学専攻日本語教科書に見られる日本の小・中・高等学校国語教科書との近似性の実態 —掲載作品の様式・年代・題材の計量分析から—
Title	Resemblances between Japanese Language Textbooks Used at Chinese Universities and Kokugo Textbooks Used at Japanese Primary, Middle and High Schools: A Quantitative Analysis of the Styles, Periods and Themes of the Texts
著者	田中 祐輔
Author	TANAKA Yusuke
掲載号	28巻8号
発行日	2013年3月26日
開始ページ	279
終了ページ	296 (英文要旨:p.337)
著作権者	計量国語学会

中国の大学専攻日本語教科書に見られる 日本の小・中・高等学校国語教科書との近似性の実態

—掲載作品の様式・年代・題材の計量分析から—

田中 祐輔 (早稲田大学大学院日本語教育研究科博士後期課程・
日本学術振興会特別研究員 DC)

キーワード：中国大学専攻日本語教育，国語教科書，日本語教科書，
精読，計量分析，様式，年代，題材，近似性

1. 研究の背景

1.1 中国の大学専攻日本語教育と「国語教育」

現代中国における日本語教育は，中華人民共和国建国直後から開始されてはいたが，大規模な形で全国的に進められるようになったのは 1970 年代に入ってからであり，各地の大学に日本語専攻学科が設置された (李，2007)．当時，教科書に掲載された主な文章は，中国事情を日本語で紹介した『人民中国』¹の記事や，中国の文学作品を日本語に翻訳したものなどであり，日本のものは小林多喜二のプロレタリア文学作品や日本共産党関係者の手記などが掲載されるに留まっていた (牧田，1979)．その後，1978 年の日中平和友好条約や，1979 年の日中文化交流協定の調印と改革开放政策によって，市場経済体制への移行だけではなく対日開放政策も進められたことや，「四个现代化²」の一環として，日本の科学技術や社会システム，文化といったあらゆる方面への情報収集，及び研究活動が活発化したことなどから，高度日本語人材養成が急務となった．高等教育機関における日本語教育現場では教育体制や，教育内容，教育手法など，様々な面から改革の必要が指摘された．中でも，シラバスや学習内容が体现された教科書の変革は重要視され，各大学や出版社，研究機関で作成が進められた (曹，2008)．

こうした動きに伴い，大学専攻日本語教育の現場では，日本在住で社会や文化事情に精通した教師の必要性が高まり，日本から多数派遣されるようになった．様々な形で中国に渡っ

TANAKA Yusuke (Graduate School of Japanese Applied Linguistics, Waseda University; Japan Society for the Promotion of Science Research Fellow (DC)) — Resemblances between Japanese Language Textbooks Used at Chinese Universities and *Kokugo* Textbooks Used at Japanese Primary, Middle and High Schools: A Quantitative Analysis of the Styles, Periods and Themes of the Texts —

¹ 1953 年に中国で創刊された月刊誌．中国の政治，経済，社会，文化，観光，及び日中交流に関する幅広い情報が日本語で報道されている．

² 工業，農業，国防，科学技術の四分野での近代化の達成を目標とした国家計画．

た教師達³は、自身や学生のための参考資料として、日本で作成された日本語教科書や、日本の国語教科書を中国国内に多数持参した。これらは、そのまま主教材として授業で利用されると共に、現地で作成される教科書の貴重な材料となることもあった。例えば、1980年代前半に北京第二外国语学院に派遣された国語科教諭によると、実際の教育現場では、中国で作成された教科書を使用する大学は珍しく、基礎段階⁴では、日本の大学が留学生向けに発行した教科書を、高年級段階では、日本の中学校や高等学校の国語教科書を利用することも少なくなかったと言う（青野、1986）。1979年から開始された神奈川県教育委員会による高等学校国語科教諭中国派遣事業でも、中国の派遣先大学側から、教師達に対し、小・中・高等学校の国語教科書の持参が求められ、現地ではそれらを用いて授業が行われた（神奈川県教育庁管理部教職員課編、1990）。1990年代に入ってから、「日本から持参する参考書や問題集などは中学二年生程度から高校入試のレベルが学生にちょうどよいなどと引き継ぎで教わった」（加藤、1996：6）と言う。

このように、中国の大学専攻日本語教育の現場では、日本で作成された国語教科書や、国語教科書掲載作品を教材の一部に利用することは珍しいことではなかったのである。こうした状況に対し、1980年前後から1990年代にかけ、教科書の課題の一つとして指摘されたものに、「第二言語としての日本語の教育は国語教育とは異なるため、高等学校国語科教諭が国語教育の内容・手法で教えることは問題である」というものがあつた。例えば、蘇（1980）は、派遣された高等学校国語科教諭について、「国語を教えるのではなく、中国人に日本語を教えるのであるから、やはり最適ではない。」（p.33）と指摘し、森田（1983）は、高等学校国語科教諭派遣は軌道に乗っているかに見えたが、国語教育と日本語教育とでは教える内容や方法が異なるため、中国の教育現場からは実はあまり歓迎されていなかったと述べている。張（2005）は、1980年代の大学専攻日本語教科書の特徴として、所謂「学校文法」に基づいて編纂されていたが、学校文法は外国語としての日本語の教育には適切ではなく、学生達のコミュニケーション能力の向上にはあまり効果的ではなかったと振り返っている。さらに、裴（1993）は、日本の代表的な近代文学作品が中心に取り扱われる読解の授業について、そもそも文学史を学ぶことが目的ではないため、日本の近代を代表する文学作品だけに特化して取り扱う必然性はないと指摘している。

1980年前後から、中国の大学専攻日本語教育において「国語教育」との複雑な関わり合いに端を発する不具合が各所で報告され、教育現場で使用される日本語教科書の内容についても問題が指摘されていたのである。

1.2 受け継がれる国語教育の内容と手法

その後、中国における日本語教育の規模の拡大は著しく、日本語教育の専門家の育成、カ

³ 各県の教育委員会や日中技能者交流センター、国際交流基金、文部科学省、JICA、青年海外協力隊などの諸機関と中国国家外国専門家局との共同事業として中・高等学校の国語科教諭や、大学で中国語学や中国文学、日本語学、国語学、国語教育学を専門とする教師や院生などが日本語教師として多数派遣された（蘇、1980；森田、1983）。

⁴ 「基礎段階」は主に大学1・2年次を指す。これに対し、「高年級段階」は主に大学3・4年次を指す。

リキュラムや教材の開発，研究の質的な向上が進み⁵，中国における日本語教育についての議論の中で「国語教育」が意識されることは，極めて稀となった。

ところが，近年，中国の日本語教科書と，日本の国語教科書との関わりを指摘する研究が現れている．例えば，篠崎（2006）では，中国の大学専攻日本語教育のための基礎段階精読⁶用日本語教科書 4 シリーズ計 16 冊の内容を分析し，（1）シリーズ前半では日本語学習用書き下ろされた文章や会話が中心となっており，（2）後半になると，日本で出版された外国人向け日本語教科書や，日本の国語教科書の文章を経て，日本人向けの既成の文章で学習する構成となっていることが指摘されている．田中（2011・2012a）では，現在広く利用されている精読用日本語教科書 37 冊（基礎段階用 20 冊・高年級段階用 17 冊）と国語教科書の作品・作家の重なり度合いについて調査が実施され，現行教科書の掲載作品・作家は国語教科書と重複することがあり，特に高年級段階では取り扱われる作品の大部分が国語教科書掲載作品であることが指摘されている．さらに，田中（2012b）では，過去の日本語教科書にも対象を広げ，1960 年代から 1980 年代までに発行された主要精読教科書計 14 冊についても調査が行われ，田中（2012a）が論じた現行教科書と過去の教科書とを比較している．結果，国語教科書との内容的近似性は，文化大革命の影響を受けた 1970 年代を除くほぼ全ての時期に見られ，1960 年代に発行された日本語教科書は小学校の国語教科書と，1980 年代に発行された日本語教科書は中学校の国語教科書と，そして，1990 年代以降に発行された現行日本語教科書は高等学校の国語教科書との重なり度合いが高く，各時代の大学専攻日本語教育の目標が，国語科の学習段階に基づいて設定されていた可能性があることが指摘されている．

1980 年前後から，中国の日本語教育では国語教育を巡る議論が展開され国語教育の内容・手法で教えることは問題であるとされたが，「日本語教育と国語教育とは異なる」という前提の下，具体的にどのような近似関係にあったのか，その実態や成果，課題がほとんど検証されないままとなっている．しかしながら，彭（2006）や篠崎（2006），田中（2011・2012a・2012b）が指摘するように，現行の中国大学専攻日本語教育の内容や手法

⁵ 修（2012）によると，現在 1,170 にのぼる中国の大学において，日本語専攻学科を設置する大学は 466 校あり，「扩招」（学生募集定員拡大）政策が開始された 1999 年との比較においても，実に 3 倍に増加している．大学や大学院で日本語教育を専攻した教師も増えている．教師数も 1979 年は 1,139 名であったが，2009 年には 15,613 名と急速に増加，海外 125 カ国 3 地域の中で最多となり，全教師数の約 31.3%を占めるようになった（国際交流基金，2011）．教科書開発も盛んで，修（2002）では，「大学教科書の戦国時代」（p.14）とあらわされている．

⁶ 中国の大学専攻日本語教育のカリキュラムの中心を担う主幹科目とされ，「精読」もしくは「総合日語」と呼ばれる（堀口，2003）．中国の大学は 2 学期制を採用しており，1 学期は約 16 週となっている．一般的には大学 1 年次から 4 年次まで設置される科目で，時間数は，基礎段階で週 8 コマ（1 コマ 45 分），高年級段階で週 6 コマ開設されている（金，2011）．大学専攻日本語教育を象徴する科目であることと，精読の教科書自体が，中国大学専攻日本語教育の教育内容や手法を如実に反映していることから，精読用教科書はこれまで大学専攻日本語教育に関する多くの先行研究において研究対象とされて来た．本研究も同様の立場から，精読の教科書を対象とし，本稿で論じる「大学専攻日本語教科書」とは，この精読の主教材を指すものとする．

にも、国語教育の内容と手法が受け継がれており、国語教育からの影響、国語教育の役割が確かに見られるのである。

2. 問題の所在

2.1 現行教科書の課題とされるもの

日本の国語教科書との掲載作品・作家の重複が見られる現行教科書であるが、国語教科書を巡る議論以外にも、教育的な課題が指摘されてきた。例えば、竈・李（2000）、王（2004）、楊・彭（2010）では、掲載文章については日本の言語や文学に関する古典的名著だけではなく、新聞や現代小説、エッセイといった文化や社会を反映する多彩な内容・様式⁷の作品を日本語教科書で取り扱う必要性が述べられている。

取り扱われる作品の年代に関する指摘もある。倪（2006）は、「時代性が欠如した使用教材」と題して「社会情勢と日本語教育の変化を反映していない問題点がある」「内容も古く実務性に乏しい」（p.38）と指摘している。田中ほか（2010）では、中国の大学専攻日本語学科生へのアンケート調査から、学習者は、現代日本の理解を目標としているため、教科書は学習者のニーズに合致しておらず、より多様で流動的な情報を提供できる教科書を編纂すべきであると述べられている。作品の内容については、篠崎（2006）では、現行日本語教科書は、掲載文章の選定基準が不明確であると指摘され、学習者の興味・関心を考慮した教材選定の方針作りが必要であると述べられている。任（2004）、劉（2008）では、教科書制作者側が、前例に倣いながら一方的に題材選びを行っている現実があると指摘され、多様化する学習者のニーズに合わせた主教材・副教材の開発が急務であると述べられている。

2.2 不明確な現行教科書の実態

先行研究による指摘は、いずれも中国の大学専攻日本語教科書を考える上で重要な論点を示すものであるが、研究手法が明記されないまま分析者が結論を述べるものや、学習者や教師へのインタビュー・アンケート調査が用いられる場合が多く、教科書の内容自体を詳細に分析・考察するものは少ない。教科書の内容に関する不備や問題が指摘され、改善・開発の必要性が論じられる一方で、「教科書そのものの実態がどのようになっているか」についての詳細な検討はなされていないのが実情なのである⁸。実際に使われている教科書そのものの内容が不明確であるため、各教育現場が用いる教科書をどのように改変すべきか、或いは、新たにどのような教科書を作成すべきかが明確にはならず、課題解決が困難となっている。

同じことは、現行教科書が国語教科書との近似性を有しているという指摘についても当て

⁷ 先行研究では、教科書に掲載された文章の内容的特徴について教師インタビューや学習者アンケートを用いて考察するものがあるが、教科書の「内容」を示す用語は統一されていない。本研究では、文章のジャンルを内容とスタイルの二つに分け、前者を「題材」とし、後者を「様式」として分析する。

⁸ 中国の大学専攻日本語教科書の基礎段階については曹（2008）において、教科書コーパスの構築、文法項目の大規模な分類が実施され、教科書研究の重要な指標となっているが、このような取り組みを除けば、教科書の内容の実態解明に取り組む研究はほとんど行われておらず、特に、高年級段階の精読用日本語教科書の内容に関する実態調査は現段階では実施されていない。こうした事情から、本研究では高年級段階の精読用日本語教科書を対象とした調査・考察を行う。

はまる。例えば、前掲の田中（2011・2012a）では、日本語教科書には国語教科書掲載作品が多数採用されていることを指摘した上で、その理由について、教科書を利用している教師・学習者への調査、『教学大纲』⁹の記述分析、日本語教科書の前書きに記された制作意図の分析、教材開発に関する先行研究の分析が行われている。中国の大学専攻日本語教育では、「正しい日本語・日本文化・日本人の心」の習得と理解が大きな目標として設定され、日本の国語教科書がそのための有効な材料の一つになっていることが述べられているが、日本語教科書と国語教科書との関係性については、掲載作品における重なり度合いのみでは明確にはならない。「正しい日本語・日本文化・日本人の心」の習得と理解という抽象的な目標が、教育実践として具体化される中で、実際に選択された国語教科書掲載作品がどのような文章であるのかについても調査・考察がなされなければ実態解明には至らないと考えられる。

以上から、国語教科書との近似性や、内容に関する問題が指摘される現行教科書について、掲載された作品の形式や年代、内容がいかなるものであるのかについて調査・考察し、現行教科書の内容的実態を解明することが必須であると考えられる。

3. 研究の目的

本研究では、国語教科書との近似性や、内容に関する課題が指摘される中国の大学専攻日本語教科書について、掲載された作品の様式と年代、題材がどのようなものであるのかについて調査・考察し、現行教科書の内容的実態を解明することを目的とする。

4. 研究の方法

本研究では、調査項目を次の3項目に設定する。(1) 現行日本語教科書に掲載されている作品の様式、初出年、取り扱われている題材。(2) 現行日本語教科書に掲載されている作品の中で国語教科書掲載作品と重複する作品の様式、初出年、取り扱われている題材。(3) 現行日本語教科書に掲載されている作品の中で国語教科書掲載作品と重複しない作品の特徴。

対象とする日本語教科書は、中国の大学専攻日本語教科書を発行する主要出版社（外语教学与研究出版社・上海外语教育出版社・大连理工大学出版社）に、中国の大学で使用されている主な精読教科書について問い合わせ、回答の中で挙げられた教科書である（表1）。国語教科書との関わりが特に指摘されている高年級段階の教科書に着目する。また、日本の小学校・中学校・高等学校国語教科書と重なる作品の集計には、戦後¹⁰の小・中・高等学校国語教科書掲載作品データベースである日外アソシエーツ編（2008）及び、阿武（2004）に掲載されている作品・作家を参照した。

⁹ 『中华人民共和国教育法』第十五条で、全国の教育事業を統括・企画・管理するものとされる国务院教育行政部门（通称「教育部」）が発表したもの。位置付けとしては、日本の「学習指導要領」に近く、大学専攻日本語教育の教育目標や内容を定めるものである。

¹⁰ 対象とした国語教科書の発行年を広く「戦後」とした理由は、国語教科書が発行されてから、その影響が日本語教科書に及ぶまでには時差が生じるため、日本語教科書と国語教科書とを比較する際は、単純に同じ年に発行されたもの同士を比較できないからである。

表 1：高年級段階精読用日本語教科書一覧

番号	教材名	作成者	出版社	出版年
HT1-1	『日语』（第五册）			1986
HT1-2	『日语』（第六册）	上海外国语学院	上海外语教育出版社	1986
HT1-3	『日语』（第七册）	日语教研室编		1987
HT1-4	『日语』（第八册）			1987
HT2-1	『高年级日语精读』（第一册）			2003
HT2-2	『高年级日语精读』（第二册）	北京大学外国语学院	上海译文出版社	2004
HT2-3	『高年级日语精读』（第三册）	学院日语系编		2004
HT3-1	『日语精读』（大学三年级用）	大连外国语学院		大连理工大学出版社
HT3-2	『日语精读』（大学四年级用）（第2版）	日本語学院编	2008	
HT4-1	『日语综合教程』（第五册）			2006
HT4-2	『日语综合教程』（第六册）	上海外国语学院	上海外语教育出版社	2011
HT4-3	『日语综合教程』（第七册）	日语教研室编		2007
HT4-4	『日语综合教程』（第八册）			2008
HT5-1	『大学日语精读』（上）	大连水产学院		大连理工大学出版社
HT5-2	『大学日语精读』（下）	日语系编	2007	
HT6-1	『日语精读』（第三册）	宿久高, 周异夫	外语教学与研究出版社	2008
HT6-2	『日语精读』（第四册）	主编		2011

前掲 3 項目を明らかにするために、HT1-1 から HT6-2 に示す主要日本語教科書に掲載された文章計 555 作品（「本文」「読み物」「課外読み物」「補助教材」「鑑賞」のいずれかとして掲載されたもの）を対象とし、以下の手順で調査を行った。(1) 各作品の様式を明らかにするために、阿武 (2004) に基づく 6 つの分類を設け集計した。具体的には、フィクション、ノンフィクション、詩、短歌・俳句、古文、漢文の 6 つである。(2) 各作品の初出年から掲載作品の年代的特徴を明らかにするために、作品の初出年を調査した上で集計を行った。(3) 各作品の題材を明らかにするために、図書の題材に基づく分類法である日本十進分類法の類目標に基づき、作品を「主題」(国立国会図書館, 2010) ごとに分類し集計した¹¹。日本十進分類法の類目標一覧は表 2 の通りである。

¹¹ 日本の図書分類法の一つ。対象資料の主題に基づいて分類を行うもので、全国の公共図書館や大学図書館で広く用いられている(国立国会図書館, 2010)。但し、日本十進分類法を用いた図書分類は、図書館ごとで異なる場合がある。例えば、森まゆみ「はじめの一冊」の出典は『読書休日』であるが、914.6 と分類する図書館もある(国立国会図書館では 019 に分類されている)。このため、基準を一定に揃えるために、特定の図書館の分類結果に従うこととし、本研究では国立国会図書館の分類結果を参照した。具体的な手順としては、調査対象となった日本語教科書計 17 冊に掲載された計 555 作品の出典を、国立国会図書館サーチ(<http://iss.ndl.go.jp>)を用いて分類し集計した。機関によって分類結果が多少異なることには、基準としての不完全さが否めないが、そもそも完全な図書の分類法は現時点では存在せず、一つの基準を設けて調査対象全体の傾向を明らかにするには日本十進分類法を用いることが適当であると判断した。

表 2：日本十進分類法類目標一覧

分類番号	項目名	詳細内容
0	総記	図書館, 図書, 百科事典, 一般論文集, 逐次刊行物, 団体, ジャーナリズム, 叢書
1	哲学	哲学, 心理学, 倫理学, 宗教
2	歴史	歴史, 伝記, 地理
3	社会科学	政治, 法律, 経済, 統計, 社会, 教育, 風俗習慣, 国防
4	自然科学	数学, 理学, 医学
5	技術	工学, 工業, 家政学
6	産業	農林水産業, 商業, 運輸, 通信
7	芸術	美術, 音楽, 演劇, スポーツ, 諸芸, 娯楽
8	言語	言語
9	文学	文学

(4) 以上の (1) ~ (3) を行い, 現行日本語教科書全体の内容的特徴を明らかにした上で, 国語教科書掲載作品と重なる作品 (以下, 「国語教科書重複作品」とする) と, 重ならない作品 (以下, 「日本語教科書のみ掲載作品」とする)¹²が具体的にどのような作品であるのかを明らかにする. まず, 様式的特徴と題材の特徴に関する分析では, 日本語教科書が国語教科書とどの程度関わりを持つのかについて, その度合いを計るためにロジスティクス回帰分析法を用いて, 国語教科書と重複する作品が占有する度合い (以下, 「国語教科書連関係数」とする) を算出し, 「国語教科書重複作品」と「日本語教科書のみ掲載作品」の特徴の異同について明らかにした. 国語教科書連関係数¹³は, 以下の数式によって定義される¹⁴.

$$\begin{cases} y = f(x) \in [0, 1] \\ x_1 = \text{国語教科書重複作品}, x_2 = \text{日本語教科書のみ掲載作品} \end{cases} \\ \Rightarrow y_1 = f(x_1) = f(\text{国語}) = 1, y_2 = f(x_2) = f(\text{日本語}) = 0$$

続いて, 上記調査結果に基づき, 考察ではさらに教科書掲載作品の様式的特徴 (各文章の様式がどのような題材に属するのか), 題材の特徴 (各文章の題材がどのような様式に属するのか), そして年代的特徴 (各年代の文章がどのような様式・題材の特徴を有するのか) の詳細を明らかにするために, 文章の様式, 初出年, 題材について集計結果のクロス集計を行い, 一元的な調査では見え難いデータ同士の関係を導き出した.

¹² 調査対象となった全 555 作品のうち, 「国語教科書重複作品」は計 341 作品 (61%), 「日本語教科書のみ掲載作品」は計 214 作品 (39%) となっている.

¹³ y の数値が 1 に近くなるほど, その様式と内容に属する作品総数のうち, 「国語教科書重複作品」が多いことになる.

¹⁴ 例えば, 日本語教科書に掲載された「評論」(計: 163) について, 「国語教科書重複作品」が 75 作品あり, 一方で, 「日本語教科書のみ掲載作品」は 88 作品あった. 上記数式の定義に当てはめると, $y = (75 \times 1 + 88 \times 0) / 163 = 0.46$ となる.

5. 結果と考察

5.1 取り扱われる作品の様式

HT1-1 から HT6-2 に示す主要日本語教科書に掲載された文章計 555 作品の様式を明らかにするために、阿武（2004）に基づく分類を設け集計した（図 1）。さらに、日本語教科書の各様式に属する作品の国語教科書連関係数を算出した（図 2）。

5.1.1 高等学校国語科を連想させる「評論」「随想」「小説」「古文」が 74%

図 1 について、様式としては「評論」が最も多く 163 作品で、全 555 作品のうち 29.4% を占める。続いて、「随想」が 119 作品（21.4%）で、「評論」と「随想」を合わせると約半数を占め、「小説」80 作品（14.4%）、「古文」53 作品（9.5%）も含めると、全体の 74% を占める。「評論」「随想」「小説」は近現代の作品が大半を占め、さらに「古文」や「短歌・俳句」「漢文」も存在するところを見ると高年級段階日本語教科書は、日本の高等学校の国語科で取り扱われる内容を連想させる。

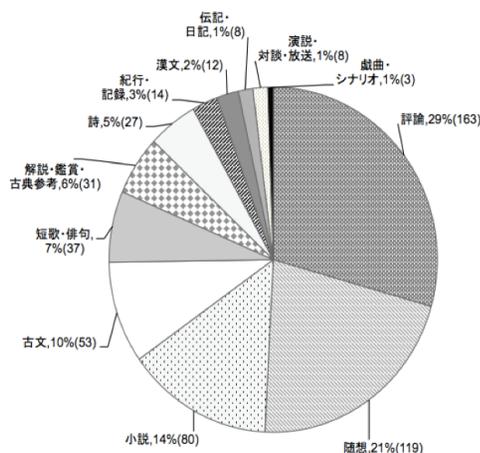


図 1：各様式の作品数と全体に占める割合

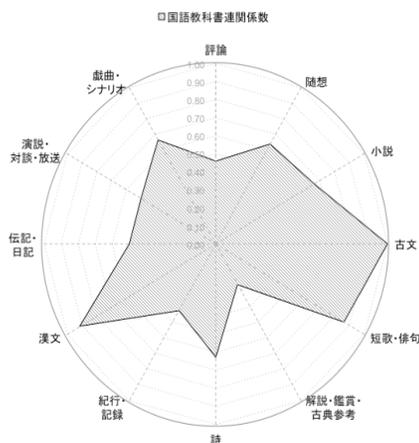


図 2：各様式の国語教科書連関係数

5.1.2 “様式”としての「文学」は半数に満たない

先行研究では、大学専攻日本語高年級段階のカリキュラムや教科書は小説などの“文学作品”の読解が中心となっていると指摘されている（陳，1998：205）。しかし、本研究による調査の結果、詩・小説・戯曲などの文学作品として認識されるものは、「小説」が 80 作品（14.4%）、「古文」が 53 作品（9.5%）、「短歌・俳句」が 37 作品（6.7%）、「詩」が 27 作品（4.9%）、「戯曲・シナリオ」が 3 作品（0.5%）で、全体の約 36%となっている（図 1・表 3）。この数値から、先に挙げた先行研究の指摘通り日本語教科書掲載作品の様式を“文学作品に偏っている”と見るかについては、それぞれの教育目標や考え方にもよるが、少なくとも半数にも満たないということが明らかとなった。

5.1.3 様式における国語教科書との関連—作品もしくは作家が重複する—

図 2 は、日本語教科書における各文章様式の国語教科書との「関連性」を数値化するために、各文章様式が国語教科書と重なる度合いを国語教科書連関係数として表したものであ

る。連関係数が 0.5 以上 (表 3「連関係数」欄太字) を示したのは、数値が高い順から、古文 (1.00)、漢文 (0.92)、短歌・俳句 (0.86)、戯曲・シナリオ (0.67)、小説 (0.66)、随想 (0.64)、詩 (0.63)、伝記・日記 (0.50)、演説・対談・放送 (0.50) であった。逆に、連関係数が 0.5 よりも低かったものは、評論 (0.46)、紀行・記録 (0.43)、解説・鑑賞・古典参考 (0.26) であった (図 2・表 3)。

日本語教科書に掲載された作品のうち、「古文」に該当する掲載作品は全てが「国語教科書重複作品」であった。「漢文」は、唯一白居易の「憶江南」が「日本語教科書のみ掲載作品」で、その他の作品は全て「国語教科書重複作品」となった。但し、白居易の作品は国語教科書に掲載されているため作家としては重複する。このことは、連関係数 0.5 以上を示した文章様式に共通する特徴である。即ち、作品そのものが重複するものが大半であり、さらに、作品が重複しなくとも作家が重複する傾向にあるのである。「小説」「随想」「詩」についても、国語教科書掲載作品と重ならない作品でも、井上靖、寺田寅彦、立原道造などといった国語教科書に掲載されることの多い作家の作品が掲載されている。

表 3：各様式の作品数・割合・国語教科書連関係数と作品の具体例

様式	作品数	割合	連関係数	具体例	
				国語教科書重複作品	日本語教科書のみ掲載作品
評論	163	29.4%	0.46	「日本人の空間感覚」(山崎正和)	「日本人と日本語」(小山修三)
随想	119	21.4%	0.64	「山上の景観」(辻まこと)	「龍舌蘭」(寺田寅彦)
小説	80	14.4%	0.66	「ナイン」(井上ひさし)	「嬢捨」(井上靖)
古文	53	9.5%	1.00	「おくのほそ道」(松尾芭蕉)	/
短歌 俳句	37	6.7%	0.86	「夏はきぬ(短歌)」(福島泰樹など) 「新緑(俳句)」(福安風生など)	「短歌(谷かげに水はやく飛びて霧のたつ富士見高原すでに秋かも)」(中村憲吉) 「俳句(朝顔は蜘蛛のいとも咲きにけり…)」(加賀千代)
解説 鑑賞 古典参考	31	5.6%	0.26	「俳句の鑑賞」(加藤楸邨) 「『徒然草』について」	「現代詩の概観」(塩田良平・吉田精一) 「短歌を味わう」(木俣修) 「和歌表現の手引き」(久保田淳編『古典和歌必携』)
詩	27	4.9%	0.63	「千曲川旅情の歌」(島崎藤村)	「朝に」(立原道造)
紀行 記録	14	2.5%	0.43	「草原の記-モンゴル紀行」(司馬遼太郎) 「フシダカバチの秘密」(アンリ・ファーブル(作)・古川晴夫(訳)『昆虫記』)	「中国名茶紀行」(布目潮胤)
漢文	12	2.2%	0.92	「早発白帝城」(李白)	「憶江南」(白居易)
伝記 日記	8	1.4%	0.50	「田中正造」(上笙一郎) 「断腸亭日乗」(永井荷風)	「めくらになった名僧」岸本英夫
演説 対談 放送	8	1.4%	0.50	「現代日本の開化-明治 44 年 8 月和歌山において述-」(夏目漱石) 「日本語を考える(対談)」(司馬遼太郎・桑原武夫)	「日本語のころ」(金田一春彦) 「子規的リアリズム(対談集)」(司馬遼太郎・赤尾兜子・井上ひさし) 「心が生まれた惑星」(『脳と心 NHK サイエンススペシャル驚異の小宇宙・人体 2.1 心が生まれた惑星~進化~』)
戯曲 シナリオ	3	0.5%	0.67	「キューリー夫人」(宮津博『東童児童劇選集』) 「燕の駅」(灰谷健次郎原作/西村与志木・北村充史脚本)	「大予言」(浜田金広・テレビドラマ「世にも奇妙な物語」)

5.2 取り扱われる作品の初出年—1970・1980・1990 年代に発表された作品が全体の半数— HT1-1 から HT6-2 までの日本語教科書に掲載された文章計 555 作品を対象に、各作品の年

代を明らかにするために、作品の初出年を調査し作品数を年代ごとに集計した（図3）¹⁵。

各年の作品数の10年単位ごとの量的推移を示した図3の曲線について、1990年代に発表された作品が最多で、全555作品のうち18%（100作品）となった。続いて、1970年代（92作品・16.6%）、1980年代（83作品・15%）、1960年代（47作品・8.5%）、1940年代・2000年代（共に25作品・4.5%）、1910年代（12作品・2.2%）、1920年代（11作品・2%）、1900年代・1930年代（共に9作品・1.6%）、1800年代後半（4作品・0.7%）となった。

取り扱われる作品について、先行研究では、作品そのものが古いという指摘がなされているが（倪，2006）、本調査の結果、2000年以降の作品も掲載されており、新しい作品が全くないわけではないことが明らかとなった。しかし、全体の傾向としては、1970・1980・1990年代の30年間に発表された作品が、総作品数の約50%を占めることが判明した。また、各年の作品数の10年単位ごとの国語教科書連関係数を示した図3の実線折れ線グラフによると、国語教科書連関係数は、年代が新しくなるにつれ減少傾向にあり、中国の大学専攻日本語教科書に掲載された作品の傾向として、初出年が古い作品ほど、「国語教科書重複作品」の割合が高いということが明らかとなった。中国の大学専攻日本語教科書について考えるには、年代の古さに加え、特定の年代の作品が集中している実態についても考慮する必要があると言えるだろう。

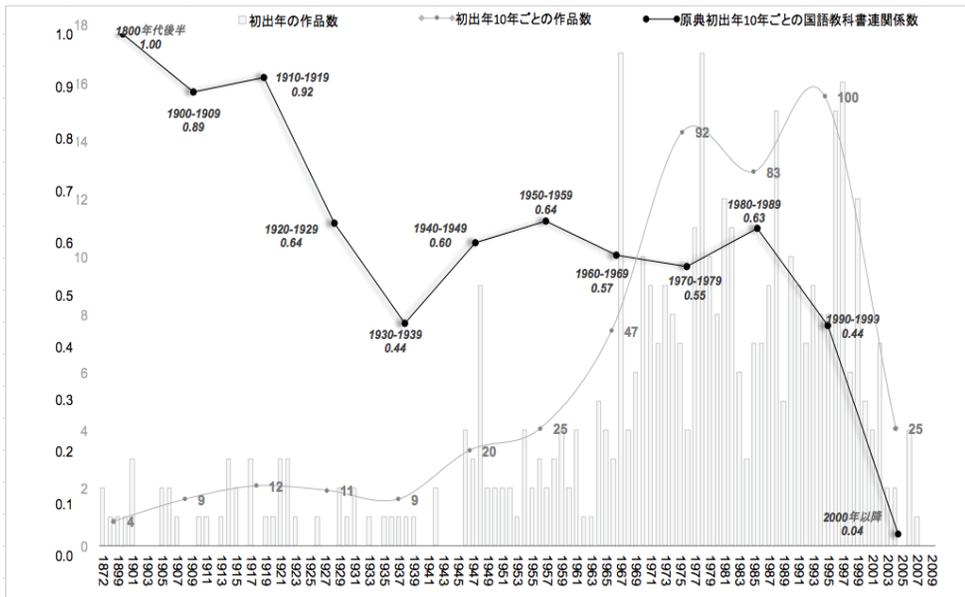


図3：初出年別作品数と割合

¹⁵ 本調査では主に近現代作品の初出年の状況を把握することを目的としているため、全555作品のうち、本集計結果からは「古典」（計：61）を除いた。また、原典出版年「不明」（計：61）も年ごとに区分できないため、分析対象から除外した。

5.3 取り扱われる作品の題材

HT1-1 から HT6-2 に示す主要日本語教科書に掲載された文章計 555 作品を対象に、各作品の題材を明らかにするために、日本十進分類法類目標の各項目に分類し集計した (図 4)。また、題材ごとに「国語教科書重複作品」がどの程度存在するかを明らかにするために、各題材の国語教科書連関係数を算出した (図 5)。

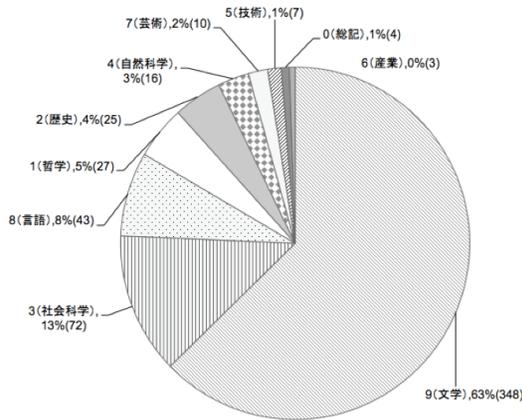


図 4: 各題材の作品数と全体に占める割合

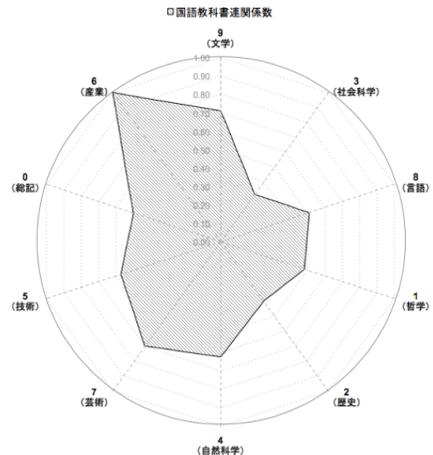


図 5: 各題材の国語教科書連関係数

5.3.1 作品の題材は「文学」が 62.7% を占める

図 4 について、作品の題材として、圧倒的な割合を占めるのが「文学」に関する内容で、全 555 作品中 348 作品 (62.7%) を占める。日本十進分類法に基づき「文学」をさらに分類した結果、「日本文学」が 322 作品 (「文学 (348 作品)」全体の 92.5%)、「中国文学」が 20 作品 (同 5.7%)、「その他の外国文学」が 3 作品 (同 0.9%)、「文学総合」が 3 作品 (同 0.9%) であった。作品の題材として「文学」の次に大きな割合を占めるのが、「社会科学」(72 作品・13.0%) であり、続いて「言語」(43 作品・7.7%)、「哲学」(27 作品・4.9%) と続くが、いずれも「文学」の半数にも満たない (図 4・表 4)。中国の大学専攻日本語教科書の取り扱う作品の題材としては、「文学」が他の題材との比較において圧倒的に多いことが明らかとなった。

5.3.2 題材としての「文学」に偏重し、大半は「国語教科書重複作品」

図 5 は、日本語教科書に掲載された文章の題材別に、国語教科書と重なる度合いを、国語教科書連関係数として表したものである。連関係数が 0.5 以上を示したのは、数値が高い順から、産業 (1.00)、文学 (0.71)、芸術 (0.70)、自然科学 (0.63)、技術 (0.57)、言語 (0.51)、総記 (0.50)、であった。逆に、連関係数が 0.5 よりも低かったものは、哲学 (0.48)、歴史 (0.40)、社会科学 (0.32) であった (図 5・表 4)。

表 4：各題材の作品数・割合・国語教科書連関係数と作品の具体例

様式	作品数	割合	連関係数	具体例	
				国語教科書重複作品	日本語教科書のみ掲載作品
文学	348	62.7%	0.71	「日本文学」：「志賀直哉論」（小林秀雄『小林秀雄全集（第5巻）』文芸批評の行方） 「中国文学」：「鲁迅の印象」（増田渉『鲁迅の印象』） 「その他の外国文学」：「最後の授業」（ドーデ（著）／松田稔（訳）） 「文学総合」：「言葉と身体」（前田愛『文学テキスト入門』）	「日本文学」：「近代文学の成熟『白樺』派の作家たち—理想主義文学」（奥田健男『日本文学史：近代から現代』） 「中国文学」：「中国と日本—中国小説の流れ」（尾上兼英『文学の東西』辻理・芳賀徹編著・日本放送出版協会） 「その他の外国文学」：「夜と霧」（ヴィクトール・E・フランクル（著）／池田番代子（訳）『夜と霧—新版』） 「文学総合」：「小説の読者」（桑原武夫『桑原武夫全集第1巻』）
社会科学	72	13.0%	0.32	「日本人の契約観」（渡辺洋三『法というものの考え方』）	「経済学の定義」（熊谷尚夫『現代経済学入門』）
言語	43	7.7%	0.51	「時候のあいさつ」（池田摩耶子『日本語再発見：異質の認識』）	「女ことば 男ことば」（上野千鶴子『言語』大修館・1999年1月号）
哲学	27	4.9%	0.48	「癒しとしての死の哲学」（小浜逸郎『癒しとしての死の哲学』）	「『幸福論』 退屈と興奮」（ラッセル（作）／安藤貞雄（訳））
歴史	25	4.5%	0.40	「田中正造」（上笙一郎・光村図書『国語六（下）希望』）	「歴史の中の日本」（司馬遼太郎『歴史の中の日本』）
自然科学	16	2.9%	0.63	「気象と人間」（倉嶋厚・光村図書『国語2』）	「日本の渚」（加藤真『日本の渚：失われゆく海辺の自然』）
芸術	7	1.3%	0.70	「『美しさの発見』について」（高階秀爾『日本近代の美意識』）	「冬の山上にて」（東山魁夷『風景との対話』）
技術	4	0.7%	0.57	「資源循環型社会への道」（三橋規宏『ゼロエミッションと日本経済』）	「庭」（渡辺武信『住まい方の演出：私の場を支える仕掛けと小道具』）
総記	4	0.7%	0.50	「知の旅への誘い」（中村雄二郎『知の旅への誘い』）	「趣味としての読書」（平田秀木『書窓雑筆』（双雅房）1935年11月）
産業	3	0.5%	1.00	「森と文明の物語」（安田喜憲『森と文明の物語：環境考古学は語る』）	/

題材の中で、国語教科書連関係数が高いものは「文学」で 0.71 を示した。この「文学」を題材とする作品全 348 作品のうち、247 作品は「国語教科書重複作品」である¹⁶。中国の大学専攻日本語教科書は題材として「文学」に偏重しながら、それらの大半は「国語教科書重複作品」であることが明らかとなった。

5.3.3 二重の偏り—題材としては「文学」、様式としては「評論」「随想」に偏る—

掲載された文章の題材の大半が「文学」に関するものである事実から、中国の大学専攻日本語教科書の掲載作品が「様式」としての「文学」は実は半数に満たないにも関わらず、文学作品に偏っている（陳，1998：205）と指摘される理由が浮かび上がって来る。

図 6 は、「様式」と「題材」のクロス集計を行った結果を示したものである。各様式の文章は、いずれも題材としては「文学」に属する作品の数が多く分かる。特に、様式として最も数が多い「評論」についても、題材として「文学」に属する作品が多く、先行研究で指摘される文学偏重は、様式としての「文学」というよりは、「文学をテーマやトピックに据えた文章の“題材”への偏重」の色合いが強いと考えられる。

¹⁶ 題材の中で国語教科書連関係数が最も高いのは「産業」であるが、調査対象全 555 作品のうち「産業」は 3 作品のみの項目であるため、連関係数が 1.00 を示したとしても、作品全体の中での有意な特徴としては見えずことはできない。

この実態は、先行研究ばかりではなく、教科書作成者にも把握されておらず、本研究が対象とした教科書の前書きには、文章の様式と題材に多様性を持たせるよう配慮したことが強調されている (HT1-1~HT6-2)。例えば、HT1-1~HT1-4『日语』(第五~八册)の前書きには、「文章の題材について、日中友好、社会事情、倫理と道徳、文化の特徴、言語と文字、人物と歴史、自然と風景など、あらゆる分野の文章を引用し、さらに文章の様式は、評論、随筆、散文、紀行、小説、詩、伝記、講演、シナリオ、記録

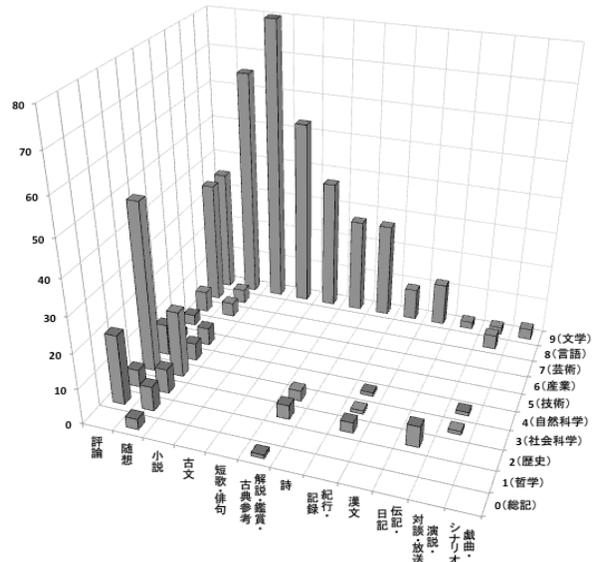


図6：様式と題材のクロス集計結果

などから幅広く収集した」(『日语』前書き：1，筆者訳)とされている。しかしながら、先に指摘した通り、本研究の調査結果からは、中国の大学専攻日本語教科書は、題材としては「文学」に、様式としては「評論」「随想」に偏るという、二重の偏りが生じていることが明らかとなっており、教科書作成者の認識と実態との間にギャップが存在することが分かる。

以上から、現行教科書の課題とされている多様な様式の文章選定を実現するためには、仮に、先行研究で指摘されているような教科書の様式の偏りを問題視し、その多様性の維持に注力したとしても、題材の偏りに配慮しなければ、課題が解決されることは難しいと言える。中国の大学専攻日本語教科書について考えるには、この「二重の偏り」を把握し、その結果を考慮した作品選定を行う必要があると指摘できる。

5.3.4 国語教科書掲載作品・作家とは重ならないもの

「日本語教科書のみ掲載作品」の中には、作品そのものが国語教科書掲載作品とは重ならないだけでなく、さらに作家についても国語教科書掲載作品と重複しなかった作品も存在した。例えば、「鑑真和上」(『人民中国』(1978年2月号)・『人民日报』(1978年6月5日「東海六渡知遂宏願」))、「『オンリー・ミー』より(正義・逆鱗)」(三谷幸喜/『日本語ジャーナル』1999年9月号)、「大予言」(浜田金広/1991年1月放送テレビドラマ「世にも奇妙な物語」シリーズの一話分のシナリオの全体)、「心が生まれた惑星」(NHK取材班『脳と心 NHKサイエンススペシャル驚異の小宇宙・人体 2.1 心が生まれた惑星～進化～』)、「近代文学の成熟『白樺』派の作家たち—理想主義文学」(奥田健男『日本文学史：近代から現代』1994年放送)、「経済学の定義」(熊谷尚夫『現代経済学入門』)、「民俗学への招待(福の神)」(宮田登『民俗学への招待』)、「神道と日本人」(安蘇谷正彦『神道とはなにか』)、『日本を知る小事典 6(自然とところ)』現代教養文庫、「祭り」(日本文化庁編『外国人のための日本語読本中級 8』)、「俳句」(加賀千代/齋藤孝『声に出して読みたい日本語

2』) などである。

こうした「日本語教科書のみ掲載作品」には、(1)『人民中国』や『人民日報』、『日本語ジャーナル』といった新聞や雑誌記事、(2) テレビドラマやテレビドキュメンタリー作品のシナリオや概要書、(3) 「経済学」や「民俗学」といった学問分野や、「神道」や「祭り」「俳句」といった宗教や文化について概説した一般書や日本語教科書からの引用文章が見られた。比較的新鮮で社会に関わりのある情報や、学習者が関心を持ちそうな文章、学習者が得ることが望ましいと考えられる教養についても補おうという作成者側の考慮の跡が見られる。但し、5.1 と 5.3 で述べた様式と題材の集計結果からも分かるように、補填分の全体に占める割合は僅かで、バランスが取られているとは言い難い。

6. 結論と今後の課題

以上、本研究では、国語教科書との繋がりや様々な課題が指摘される中国の大学専攻日本語教科書について、掲載された作品の様式や年代、或いは題材がどのようなものであるのかについて調査・考察し、現行教科書の内容的実態を明らかにした。以下に結論と今後の課題について述べる。

6.1 中国の大学専攻日本語教科書の内容の実態

中国の大学専攻日本語教科書について、様式・年代・題材を中心に調査・考察を行ったところ、様式としては「評論」「随想」「小説」「古文」が 74%を占め、国語教科書連関係数は評論 (0.46) を除いて、全て 0.5 以上を示した (随想 (0.64), 小説 (0.66), 古文 (1.00))。そしてこれらの作品は、作品そのものが国語教科書掲載作品と重複するものが大半であり、さらに、作品が重複しなくとも作家が重複する場合が多いことが明らかとなった。中国の大学専攻日本語教科書掲載作品の様式からは、日本の高等学校の国語科で取り扱われる内容が連想され、実際に日本の高等学校の国語科で取り扱われる作品の占める割合は大きいことが明らかとなった。

また、取り扱われる作品の年代について、先行研究では、作品そのものが古いという指摘がなされることもあったが、本調査の結果、2000 年以降の作品も掲載されており、近年の作品が掲載されていないわけではないことが明らかとなった。しかし、全体の傾向としては、1970 年代・1980 年代・1990 年代の 30 年間に発表された作品が、総作品数の約 50%を占めることが判明した。また、初出年が古い作品ほど、「国語教科書重複作品」の割合が高いということが明らかとなった。中国の大学専攻日本語教科書について考えるには、年代の古さに合わせ、特定の年代に作品が集中している実態についても考慮する必要があることも明らかとなった。

中国国内で使用されている日本語教科書の題材について調査した結果、「文学」が全体の 62.7%を占め、教科書に掲載されている文章の過半数が文学に関するものであることが明らかとなった。それらは 7 割以上が「国語教科書重複作品」となっており、中国国内で使用されている日本語教科書が、日本の国語教科書に近似する形で構成されていることが明らかとなった。

日本語教科書掲載作品の中には、国語教科書掲載作品の作品・作家のいずれにも重ならないものも一部存在した。それらの中には、新聞や雑誌記事、テレビドラマやテレビドキュメンタリー作品のシナリオや概要書、学問分野、宗教や文化について概説した一般書や、日本

語教科書からの引用文章が見られ、比較的新鮮で社会に関わりのある情報や、学習者が関心を持ちそうな文章、学習者が得ることが望ましいと考えられる教養についても補おうという作成者側の考慮の跡が見られた。しかしながら、補填分の全体に占める割合は僅かで、バランスが取られているとは言えない。

本研究の調査結果からは、日本語教科書掲載作品の様式・年代・題材に偏りが見られ、そうした偏りの中に国語教育との関わりが色濃くあらわれていることが判明した。では、なぜ、現代中国における大学専攻日本語教育の教科書はこのような形で編纂されて来たのだろうか。筆者は田中（2013）において、別途研究課題を設け、1960年代から現在までの間に大学専攻日本語教育に携わった教師29名に対するインタビュー調査結果と、『教学大纲』や行政府資料、学術誌、教科書を作成・利用した教師の報告書から考察した。結果、中国の日本語教科書が国語教科書との近似性を保つ形で固定化されて来た要因として、(1)日本語の模範的な表現形式、日本文化、日本人の思考を文学作品の内に見出し、古典文学から近現代文学までを学ぶことを重視する教育思想が教師間、『教学大纲』、研究者間で広く共有されて来たこと。(2)1970年代の日中関係の深化が高度な日本語人材養成を急務とし、日本からの教師派遣や国語教科書の流入を後押ししたことで、当時検討されていた古典文学も含めた文学教育の実施が可能となり、最も手近であった日本の国語教科書が用いられたこと。(3)高度な外国語人材の到達目標としては、対象国の高等学校における母語教育科目を修了した程度が目安とされ、教材としては高等学校の国語教科書掲載作品が適当と考えられたこと。(4)国語教科書掲載作品は、中立性と合理性、普遍性、そして規範性という面から、中国の大学専攻日本語教育の教材として妥当であると考えられたこと。(5)高等学校の国語教育の内容・手法が中国の日本語教育現場で長年用いられることによって定着し、慣習化したこと。以上の5点が明らかとなった。本研究が明らかにした教科書の内容的な偏り（様式としては「評論」「随想」「小説」「古文」が74%を占め、題材としては「文学」のみで62.7%を占め、それらの大半は「国語教科書重複作品」となっている）は、文学作品の内に日本語の模範的な表現形式、日本文化、日本人の思考が見出され、文学教育が日本語教育の中で重要なものと見なされたこと。そして、大学専攻外国語教育の到達目標として、高等学校の母語教育科目が設定され、日本語教育の場合は、古典文学から近現代文学までを取り扱う日本の国語教科書が参照されたこと等が影響したものであると考えられる。

本稿が述べた現行日本語教科書の実態の中でも、特に、題材が「文学」に、様式が「評論」と「随想」とに偏るといふ、二重の偏りについては、先行研究や教科書作成者の認識と実態との間にギャップが生じていることが指摘できる。このことから、現行教科書の課題とされている多様な様式の文章選定を実現するためには、仮に、先行研究で指摘されているような教科書の様式の偏りを問題視し、その多様性の維持に注力したとしても、題材の偏りに配慮しなければ、課題が解決されることは難しいと言える。中国の大学専攻日本語教科書について考えるには、この「二重の偏り」を把握し、題材のバランスも考慮した作品選定をする必要があると指摘できる。但し、そのためには、特定の題材の作品を補充するといった取り組みだけでは根本的な解決には至らないであろう。なぜなら、田中（2013）に指摘されているように、現行日本語教科書の内容は、思想的な要因や歴史的背景に規定されている実情があり、性急に目先の打ち手を見つけようとするだけでは不十分だからである。

これまで、中国の大学専攻日本語教育では国語教育と日本語教育とは異なるといった前提

から、国語教育の内容や手法が、ややもすれば十分な議論なしに否定される傾向にあったが、今後は、「国語教育」が「日本語教育」に果たした役割や、両者の関係性を正確に捉え、現代中国の日本語教育が今後何を目指し、そのためには、どうあるべきかについて活発に議論することが不可欠であるだろう。そうした議論の積み重ねこそが今後の日本語教科書を構築する土台となるものと筆者は考える。

6.2 今後の課題

本研究の成果は、中国の大学専攻日本語教科書について、国語教科書との関わりの観点から、掲載された作品の様式や年代、或いは題材がどのようなものであるのかについて計量調査を通して分析し、先行研究や教科書作成者の認識が及んでいなかった現行教科書の内容的実態について明らかにした点にある。

課題も残されている。本研究では、現行日本語教科書について国語教科書との関わりも含めた内容的実態が明らかになったが、現行の日本語教科書が、いかなる過程を経て現在の形に定着したのかについての通時的な視点を含めた考察は行うことができなかった。中国における日本語教育の課題を解決に導くためには、多角的な視点から日本語教育の背景を通時的・共時的に明らかにして行く必要があるだろう。また、国語教科書の様式・題材・年代の詳細と、国語教科書に掲載されながらも、日本語教科書には掲載されなかったものに関しては取り扱うことができなかった。今後、本調査と同じ手法で、国語教科書を主軸とした調査を行いたい。さらに、本研究で明らかとなった教科書の実態が、個々の実践においてどのように作用するのかについて、教室活動を始めとする個別の実践事例に深入りし、詳細なプロセスを究明したいと考えている。いずれも、筆者自身の課題とし、引き続き研究を進めて行きたい。

文献

- 青野文敏（1986）中国における日本語教育について『愛媛国文研究』36，愛媛国語国文学会，pp.71-79.
- 阿武泉（2004）全教材リスト『戦後高等学校国語教科書データベース』調査機関：財団法人教科書研究センター附属教科書図書館・東書文庫・国立教育研究所教育図書館.
- 王婉莹（2004）日语专业低年级精读课教材分析『清华大学学报』19，清华大学，pp.96-99.
- 加藤明（1996）茂木誠氏と上海外大『河江通信』第2号，中国派遣教師の会発行，p.7.
- 神奈川県教育庁管理部教職員課編（1990）『中国派遣日本語教師10年の軌跡1979～1989』神奈川県教育委員会.
- 金華（2011）中国の大学の日本語専攻精読コースにおける一考察『言語文化論集』32(2)，名古屋大学大学院国際言語文化研究科，pp.115-128.
- 倪鏡（2006）中国における日本語教育について—高等教育日本語専攻を中心に—『日本地域政策研究』(4)，日本地域政策学会，pp.33-39.
- 国際交流基金（2011）『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2009年』凡人社.
- 国立国会図書館（2010）日本十進分類法（NDC）新訂9版分類基準（2010年度版）
<http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/zan9.html>（最終確認：2012/9/7）.
- 篠崎撰子（2006）精読教材の本文について．曹大峰編『日语教学与教材创新研究—日语专业基础课程综合研究—』高等教育出版社，pp.151-156.

- 修剛（2002）『大綱』制定の過程から見る精読教育の成果と課題『北京日本学研究中心2002年国際学術検討会報告論文集 日本研究的深化与拓展』, 北京日本学研究中心.
- 修剛（2012）中国における大学の日本語教育の課題と教材開発. 「中国における新しい日本語教材の開発を語る」中国大学日本語教材シリーズ完成記念公開研究会, 於: 国際交流基金日本語国際センター.
- 蘇徳昌（1980）中国における日本語教育『日本語教育』41, 日本語教育学会, pp.25-38.
- 曹大峰（2008）中国における日本語教科書作成—歩み・現状・課題—『言語文化と日本語教育』35, お茶の水女子大学日本言語文化学会, pp.1-9.
- 田中祐輔・伊藤由希子・王慧隼・肖輝・川端祐一郎（2010）中国の日本語専攻大学生に対する日本語教科書の課題—学習者への学習状況調査を通して—『大学外语研究文集』11, 长春出版社, pp.362-381.
- 田中祐輔（2011）关于中国大学日语专业基础阶段教科书与日本中小学国语教科书的比较研究—两者内容异同中所浮现的当代性课题—『日本研究集林』37, 复旦大学日本研究中心, pp.32-42.
- 田中祐輔（2012a）中国の大学専攻日本語教科書と日本の高等学校国語教科書との内容的近似性から浮かび上がる現代的課題『リテラサイズ』10, くろしお出版, pp.21-30.
- 田中祐輔（2012b）中国の大学専攻日本語教科書と日本の小・中・高等学校国語教科書との比較研究—1960・1970・1980年代の教科書掲載作品・作家の特徴と変遷—『国語教育史研究』13, 国語教育史学会, pp.11-18.
- 田中祐輔（2013）中国の大学専攻日本語教科書の現代史—国語志向と文学思想—『言語文化教育研究』11, 言語文化教育研究会, pp.70-94.
- 張淑玲（2005）日本語学習の課題とその指導『下関市大学論集』48(3), 下関市立大学学会, pp.75-84.
- 陳岩（1998）日本語専攻の教学内容改革について. 中国日语教学研究会（編）『中国日语教学研究文集』7, 香港迅通出版社, pp.199-212.
- 陈生保・胡国伟・陈华浩（編）（1986）『日语』上海外语教育出版社.
- 竇文・李庆祥（2000）高年级日语精读课教材的内容, 结构, 规模『山东师大外国语学院学报』4, 山东师大外国语学院, pp.93-96.
- 日外アソシエーツ編（2008）『読んでおきたい名著案内 教科書掲載作品 小・中学校編』日外アソシエーツ.
- 任鞏（2004）社会人の外国語教育研究『昭和女子大学大学院日本語教育研究紀要』2, 昭和女子大学, pp.90-97.
- 裴嶂（1993）中国における日本語教育:『読解』指導の問題点『小樽商科大学人文研究』（松本忠司名誉教授記念号）85, 小樽商科大学, pp.259-274.
- 彭广陆（2006）大学日本語専攻用の精読教材における文法体系. 曹大峰編『日语教学与教材创新研究—日语专业基础课程综合研究—』高等教育出版社, pp.82-97.
- 堀口純子（2003）中国の大学における日本語教育の最近の動向『明海日本語』8, 明海大学, pp.11-19.
- 牧田英二（1979）最近の日本語教育の動向'76.4-'78.2 上海『中国研究月報』371, 中国研究所, pp.29-35.

- 森田良行（1983）日本語教育界の現状と将来海外で要請される人材について『日本語教育』50, 日本語教育学会, pp.89-96.
- 杨豪杰・彭玉全（2010）日语专业学生心目中理想的精读教材『中国教育学刊』S1, 中国教育学会, pp.66-68.
- 李培建（2007）中国における日本語教育と日本語教材の編成及び使用について『中央学院大学社会システム研究所紀要』8(1), 中央学院大学社会システム研究所, pp.209-244.
- 劉玉茹（2008）中国四川省・西華大学日本語教育事情『大学教育』（特集：中国の教育）5, 山口大学大学教育機構, pp.21-33.

付記

- 1：本研究は、阿武泉（2004）「全教材リスト」を利用したものである。
- 2：本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「中国の日本語学習ニーズの多様化に対応する『学習者主体の教材開発』に関する実践研究」（2011～2012 年度，課題番号 23・4780）の研究助成による成果の一部である。

（2012 年 9 月 23 日受付）

*** Keywords and Abstracts***

Report

Resemblances between Japanese Language Textbooks Used at Chinese Universities and *Kokugo* Textbooks Used at Japanese Primary, Middle and High Schools: A Quantitative Analysis of the Styles, Periods and Themes of the Texts

TANAKA Yusuke (Graduate School of Japanese Applied Linguistics, Waseda University; Japan Society for the Promotion of Science Research Fellow(DC))

Keywords: Japanese language education at Chinese universities, *kokugo* textbooks, Japanese language textbooks, *jingdu* (intensive reading), quantitative analysis, style, period, theme, resemblance

Abstract:

This paper is to conduct a quantitative analysis of the styles, periods and themes of the texts in Japanese language textbooks used at *jingdu* (intensive reading) course at Chinese universities, whose resemblances with Japanese *kokugo* textbooks have been pointed out in previous studies. As a result, it is found out that, with respect to the styles ‘critical articles’, ‘essays’ and ‘novels’ cover the majority of the texts, followed by ‘classic texts’ and ‘*tanka* and *haiku*’- of these, more than 70% are to be the texts also found in Japanese high school *kokugo* textbooks. As for the periods when the texts were written, it became clear that texts published from the 1970’s to the 1990’s represent more than 50% of the total; moreover, it is also discovered that the older the text, the higher the probability that it is also found in *kokugo* textbooks. As far as the themes are concerned, ‘literature’ covers 62.7% of the total. Therefore, it became evident that Japanese language textbooks used at Chinese universities have a dual imbalance with respect to the themes (‘literature’) and the styles (‘critical articles’, ‘essays’, ‘novels’) of the texts. Based on the above, in order to ensure the selection of a wide variety of texts, it is difficult to solve this problem if one does not also take the resemblance of themes into consideration, even if the matter of the resemblance in style which has been pointed out by previous researches is addressed to widen the variety. It is necessary to first grasp the dual imbalance and then to make a selection of texts that takes the balance of themes into consideration.